

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6月 13日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17441

研究課題名(和文) 外界への働きかけとその受容の仕方に着目した文字教育法の開拓

研究課題名(英文) Developing a method to learn the use of characters: How to approach the outer world and ways of acceptance

研究代表者

長岡 由記 (Nagaoka, Yuki)

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：90615915

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、(1)文字に関する自発的な「問い」の内容の検討(2)子どもの「問い」に対する他者の関わり方の検討(3)文字(主に平仮名)に関する「問い」の構想(4)平仮名学習場面における学習者の発話の検討(5)漢字の自己学習力育成に関する漢字教育論の検討を行った。文字に関する自発的な子どもの発話や他者との関わり方について検討を行うことによって、文字教育の構造を捉えるための観点を導出し、文字を自ら読み書きするための能力発達の軸を加えて文字教育の在り方を検討していく必要があることを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、文字をどのように教えるのかという教授法についての研究の蓄積はあるが、文字を自ら読み書きするための力をどのように育成していくのかという視点からの研究は少ない。本研究は、読字・書字過程における文字に関する自発的な子どもの発話や他者との関わり方に着目したことにより、文字習得を多面的に捉えるための視点を見出したこと、またその習得観に立って子どもたちが自らどのようにして文字を読み書きしようと試みるのかという視点から文字教育について検討したところに意義がある。

研究成果の概要(英文)：To develop a method for children to learn about the function of characters, in this study, the following five points were examined: (1) Children's questions about characters, (2) How teachers and friends relate to children's questions, (3) Children's questions about Hiragana, (4) Children's remarks in hiragana learning, and (5) Kanji education theory on developing self-learning ability.

It is necessary to think about how to teach characters that children try to read and write hiragana and kanji by themselves.

研究分野：教科教育

キーワード：文字教育 問い 自己学習力

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

文字を読み書きする過程において、子どもたちは自ら読み書きできるようになるために試行錯誤している。例えば、文字の書き方が分からない時には、他者に尋ねたり、身の回りから対象文字(表記)を探したり、自分が書いた文字列を他者に読んでもらうことで、書きたかった文字と同じかどうかをモニタリングしたりする。そして、外界からもたらされたものの受容の仕方も一様ではなく、自分のニーズに応じて必要な情報を抽出し、自分の知識や技能に組み込んでいる(長岡 2014)。しかし、外界への働きかけと受容の仕方を含めて、子どもたちがどのように自ら文字を読み書きしようとしているのかという視点から文字教育法について検討する試みは十分に行われてはいない。そのため、文字をどのように教えるのかという教授法についての研究の蓄積はあるが、文字を自ら読み書きするための力である文字の自己学習力をどのようにして育成するのかという視点からの研究は少ない。特に、平仮名や片仮名、漢字を何文字読めるのか、書けるのかといった点に目が向きやすく、現在は平仮名指導、漢字指導のように文字の種類のカテゴリに閉じた文字教育になっており、文字教育の全体像が捉えにくい状況にある。そのため、学習者の学びが長期的に継続、発展するような文字教育の在り方について検討する必要がある。

### 2. 研究の目的

以上の課題意識に基づき、本研究では、読字・書字過程における文字に関する自発的な子どもの発話や他者との関わり方について検討を行い、文字習得を多面的に捉える視点を見出すとともに、文字の自己学習力育成につながる文字教育の構造を捉えるための観点を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

まず、他者と関わりながら主体的に学びきっかけとしての「問い」に着目し、子どもの自発的な問いかけの意味と内容について、先行研究(今井・村田 1999, 今井 2003)に基づいて検討を行う。次に、「接続期」に行う平仮名学習における「問い」の内容について、今井(2003)の分類を土台とし、文字習得における子どもの気付き(柴崎 1987a・1987b、長岡 2010・2014)を参考にしながら構想・設定する。そして、「問い」が生まれる場面と他者との関わりについて、幼児のことばの発達研究や平仮名教育研究における事例を取り上げて検討を行う。なお、「問い」は文字学習における子どもの素朴な疑問や問いかけ、指導者の問い(発問)や子どもへの問いかけを指す語として用いる。

以上の内容を踏まえ、文字教育の構造を捉えるための観点を設定する。小学校入門期における平仮名学習場面を観察し、そこでの発話や読み書きの実態を踏まえて再度構造を捉えるための観点について検討を行う【授業観察は、S 県内の小学校において 2018 年 5 月 15 日、5 月 29 日、6 月 5 日の 3 日間(1 単位時間×3 日)行い、授業中における発話、読み書きの様子を記録した】。また、それぞれの観点に関連する素材を収集、調査し、指導内容・方法について検討を行う。

### 4. 研究成果

(1) 平仮名学習は、主に幼児期から児童期へと移行する「接続期」にあたる時期に行われる。「接続期」について、お茶の水附属幼稚園・小学校・中学校/子ども発達教育研究センター(2008)は、「人との関係や周囲の環境が大きく変化することに伴い、子どもたちの戸惑い・不安・期待・緊張などを、教師が丁寧に受けとめ支えながら、教師や友だちとの豊かな関わりを基盤に、主体的に学ぶ姿勢を育む時期」(p.29)と定義している。まずは、このように豊かな関わりを基盤にした学習を展開していく必要がある時期に行われる平仮名学習における自発的な学びについて検討を行った。

今井和子(2003: 26 - 34)は保育所における幼児の言葉を収集し、問いかけることの意味とその内容について、「(1) わからないことを知ろうとする問いかけ」「(2) わかっていても聞いてみたい質問」「(3) 人とかかわりたい、会話をしたいための質問」「(4) 不安や迷いを解消したいための質問」「(5) 自分自身に問いかける言葉(内言)が発達していく過程における疑問の言葉」の 5 つに分類し、それぞれについて「何について問うているか」を指摘している。子どもたちが「問い」を発したときは、何についての「問い」なのかに加えて、何のためにその「問い」を発しているのか、また問いかけをする相手との関わり方にも目を向ける必要がある。また、他者に向けた問いかけだけでなく、自問自答を含めて「問い」を検討する必要があることがみえてきた。これらの自発的な問いかけの意味を踏まえた上で、「(1) わからないことを知ろうとする問いかけ」に基づいて平仮名学習における「問い」の構想をした結果が、以下の表 1 である。この表は、文字習得における子どもの気付きに関する先行研究(柴崎 1987a・1987b、今井 2000、長岡 2010・2014)を参考にして作成したものである。

(2) 次に、表 1 で示したような「問い」はどのような場面で生まれ、またその「問い」を契機として他者とどのようにかわり、それがどのような学びをもたらすのかについて検討を行った。自発的な「問い」についての検討は、子どもの発話だけでなくそれに対する他者の言葉も採録している大久保愛(1967)『幼児言語の発達』と野地潤家(1976)『幼児期の言語生活の実態

』を取り上げ、子どもの「問い」を抽出して「問い」の種類を確認した。その結果、幼児の自発的な「問い」には、文字の読み方や書き方を尋ねる「問い」と、文字の意味を尋ねる「問い」の二種類が確認できた（大久保 1967：166,256,261,野地 1976：407）。

表 1 平仮名学習における「問い」の例

内容	「問い」の例
( )読み方、書き方	・この文字はどう読むの？ ・「む」ってどう書くの？ ・「な」って「はな」さんの「な」？（～さんの名前にある字？） ・「あり」の「あ」と「あさがお」の「あ」は同じ？
( )文字の機能	・この文字は何（どこ）に使われているの？ ・文字が読める（書ける）とどんないいことがあるの？ ・どういう時に読んだり書いたりするの？
( )読み書きの動機（理由）	・なんで書いている（読んでる）の？ ・なぜ書かなければ（読まなければ）いけないの？
( )文字の起源（歴史）	・平仮名はどうやってできたの？ ・平仮名はいつ作られたの？
( )文字の定義	・文字って何？ ・小さな「っ」は音が（聞こえ）ないのに文字って言えるの？ ・「あかいな」って黒で書いてもいいの？
( )文字の構造	・「さ」と似ている文字は？ ・「あ」と「あ」は同じ？（五十音図を見て） ・「ん」って仲間はずれなの？ ・「ぬ」と「め」は似てるのになんで違う行や段にあるの？
( )書字（表記）法	・/ももたろー/ってなんで「ももたろお」じゃなくて「ももたろう」って書くの？
( )読み書きする時の姿勢や動き	・どうやったら読み（書き）やすくなるの？ ・ぐるぐる線は、「の」を書くときと似てるのかな？
( )その他	何かに見立てる問い ・（ありの行列を見て）これ「く」に見えない？

これらの事例を見ると、絵本を読んだり字合わせをしたりするなど、他者のそばで文字を読み書きする活動場面において自発的な「問い」が生まれていた。

文字の書き方を問われた場合の他者の応じ方をみると、例えば、濁点のついた文字を教える際に「ふに点」すに点」のように文字の構成要素を伝える場合や、実際に子どもが書いたものをみて正しいかどうかを伝える場合（「そう。」）実際に書いてみせる場合（「これ。」）があった。これらの事例を含めて、子どもたちの自発的な「問い」が生まれる場面は実際に読み書きする活動場面であり、他者とのかかわりをもとめる際には、ある程度相手の反応を予想（期待）しながら発言していることがみてとれた。また、実際に書いているところを見てもらうことによって、自らの書き方を確認しながら（認められている安心感を伴いながら）、自ら読み書きの方法を学んでいることがみえてきた。

子どもの「問い」にどうこたえていくのかという点については、発達段階を考慮すると、言語学的な回答や意味

づけをしていくというよりは、物語的な回答や意味づけをすることによって平仮名に対する見方が広がっていく場合もあると考える。例えば、( )「小さな「っ」は音が（聞こえ）ないのに文字って言えるの？」という「問い」は、文字は発音と直接結びついているわけではないということを追究していく方法もあるが、ステファノ・フォン・ロー（文）/トルステン・クロケンブリック（絵）（2008）のように、「っ」がない世界ではどのようなことが起こるのかということをも物語として提示して考えていく方法もある。いずれにしてもどのような意図でその「問い」が生まれているのかを考慮し、子ども自身が意味づけられるようにしていくことが重要である。

(3) 以上みてきた文字に関する「問い」と、湊吉正（2011：35）「言語の諸相の概観」を参考にして、文字教育の構造を捉えるための観点として、まずは以下の～の4点を設定した。

〔言語生活における文字の運用〕文字の読み方・書き方、姿勢や動き 〔文字体系〕文字の定義、文字の構造、書字（表記）法 〔文字文化の伝承と創造〕文字の起源（歴史）、その他 〔文字の機能〕文字の機能、読み書きの動機（理由）*
--

（\*読み書きの動機（理由）については、実用場面に即した動機だけでなく、文字文化に関する知の発見や創造の面白さ、文字体系（定義、構造、慣習的な表記法等）についての発見、文字の機能を用いることへの興味・関心等、全ての項目に関連する。）

これらの観点を念頭に置きながら、小学校国語科授業における文字学習場面において、学習者がどのように文字を読み書きしているのかを観察した。作文場面においては、表記ルールや文字の書き方に対する質問が発話の中心となっており、分からない文字については見せ合ったり教え合ったりする姿が見られた。また、平仮名一字を取り上げた授業場面では、文字の特徴（文字を書くときのコツ・注意点を含む）を自分なりの言い方で表現したり、自分や他者の書いた文字について評価したりする姿が見られた。これらのことから、文字教育の構造を捉える

ための観点として、学習者はどのようにして文字を読み書きする主体になっていくのかという視点も組み込む必要があると考える。これは、柴崎正行(1987a:137-138)が、「精神発達の要因」として「第一段階 文字に対して基本的信頼感を持つ段階」「第二段階 文字を自立的に使用する段階」「第三段階 自主的に文字を覚えていく段階」「第四段階 文字を実際使用する段階」を設定し、「正しく読み書きできるようになりたいという自覚を持っている」(p.138)状態へと成長していく過程を捉えようとしたことと繋がるものである。また、漢字教育研究において、田中久直(1958)が「入門期」から「主体的習得期」へと発展していく「能力発達の段階に即した系統化」を構想したこととも関連する。いずれも、子どもたちがどのように自ら文字を読み書きするようになっていくのか、そのためにどのような教育が必要なのかという視点から文字教育について考えているという点において共通している。

以上のことから、～の観点に加えて、文字を自ら読み書きするための能力発達の観点を設定し、学習者は～のどの側面にどのようにアプローチするのか、また自分や他者の文字をどのように評価し、どのように学んでいくのかという側面からも文字教育の在り方を検討していく必要があると考える。

## 引用文献

- 今井和子・村田道子、[2]子どもが問いかけることの意味、日本保育学会大会研究論、52、1999、244 - 245
- 今井和子、表現する楽しさを育てる 保育実践・言葉と文字の教育、小学館、2000
- 今井和子、3 章 言葉の獲得と思考の育ち 幼児が問いかけることの意味、幼児教育リーディングズ、北大路書房、2003、25 - 37
- 大久保愛、幼児言語の発達、東京堂出版、1967
- お茶の水附属幼稚園・小学校・中学校/子ども発達教育研究センター、「接続期」をつくる - 幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働、東洋館出版社、2008
- 柴崎正行、幼児期におけるひらがなの獲得過程とその発達の意義、淑徳大学研究紀要、第21号、1987a、125 - 141
- 柴崎正行、幼児は平仮名をいかにして覚えるか、保育の科学、ミネルヴァ書房、1987b、187-199
- ステファノ・フォン・ロー(文)/トルステン・クロケンプリンク(絵)、小さいつが消えた日、三修社、2008
- 田中久直、教育漢字の系統学習、東洋館出版社、1958
- 長岡由記、小学校入門期におけるかな文字教育論の検討 - “文字への気づき”の観点から -、国語科教育、第68集、2010、27 - 34
- 長岡由記、幼稚園年長児の「書字」方略の検討 - 外界への働きかけとその受容の仕方に着目して -、国語科教育、第76集、2014、31 - 38
- 長岡由記、「問い」から生まれる平仮名学習の検討、第130回全国大学国語教育学会(新潟大会)自由研究発表資料、2016
- 長岡由記、平仮名学習材の検討 - 文字に関する問いに着目して -、第133回全国大学国語教育学会(福山大会)自由研究発表資料、2017
- 野地潤家、幼児期の言語生活の実態、文化評論出版、1976
- 湊吉正、4. 言語・言語活動、国語教育総合事典、朝倉書店、34 - 46

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

- ・長岡由記、他者とのかわりを基盤とした平仮名学習の検討 - 平仮名に関する「問い」に着目して -、月刊国語教育研究、第543巻、2017、42 - 49

[学会発表](計2件)

- ・長岡由記、「問い」から生まれる平仮名学習の検討、第130回全国大学国語教育学会(新潟大会) 2016
- ・長岡由記、平仮名学習材の検討 - 文字に関する問いに着目して、第133回全国大学国語教育学会(福山大会) 2017

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。